

◆海員随想 続ボーイ長（見習い）賛助組合員① 今井 武

【ボーイ長の船内生活】

同日乗船した機関部のボーイ長氏は年齢が3歳先輩だが、当然良き朋友だった。船内労働がきついことから、機関部見習いの定着率の低いことはタケタケ（石炭燃料船）ではこれが共通事で、私の乗船中でも、乗船したと思ったら次の港ですたこらと下船、泣き言を聞きながら駅へ見送ったことなどもあり、せっかく海員養成所を出た人も、次から次の下船が目についた。

先のボーイ長氏の場合、彼は私を置き去りのように、お先に一っと5カ月で昇進し、コロッパス（焚火運炭員）となった。そのころ本船の配船は北九州若松・戸畑が母港化して、名古屋・京浜への航海が続いて九州勢の楽しい帰宅姿があった。私はボースンの計らいで名古屋から時々帰郷の機会を得て、そのとき柿や栗、なつめ、餅など季節の食べ物が船内で喜ばれた。

ボーイ長として乗船、即、前任者との引き継ぎは、食事の支度に各室と風呂の掃除、そしてランプ掃除とその磨きなどだ。私の山郷・飛騨は数々のダムを有し、明治の時代から主要工業都市への送電の源で、船でランプの出現には驚いた。

しかし、碇泊灯の存在は「海上衝突予防法」の見地から、ボーイ長はこの責任の重大さを感じ入ったものである。本船の居住区は中央部のハウスエリアが職員、船首楼は甲板部、船尾楼が機関部、中央の下段が艀部の配置で、特に船首は給水の不便さが著しく、飲料水は同型他船のように手押しポンプさえもなく、1トントクの清水も海水の浴用も風呂関係はエンジンルームの底まで降りて、当直者（ドンキーマン）に標札を手渡しての送水願いの仕儀だった。

デッキの煙突と並ぶサービスタンクのバルブ切り替え操作が、初心者には複雑な一行程だった。毎日の飲料水はギャレーから両手のバケツでタラップを足しげく上下する不合理極まりない給水が任務の一つ。給食手仕舞いを早く終えて、デッキワークに就く。

石鹸拭き、塗装、また、ある日にはロープ、ワイヤーの作業などデッキまわり全般の作業だ。私は特に海員養成所レスで、知らないことが多く、ひとつずつ覚えることに懸命に集中した。ボースンが手ほどきして下さったほか、親切な操舵手の一人が毎日の昼食当番が終わるのを待って、私をポートデッキへ誘いロープの結索など手を取って教えて下さった。

また、関係する参考書を与えてくれる人もあって、操舵に関わる羅針盤読みのマスターは教科資料を暗記、国際信号旗のABC…も。手旗信号は幸いに戦時中小学校で教え込まれていたことが役立った。時を経て航海中、手あきでブリッジへ昇り、実物のコンパスを覗む。先生役の操舵手の示唆で舵を持つのがうれしくもあり怖さ半分で、後ろにのたうつ航跡を眺めて、このヘタクソを自覚した。

「海員だより」